

一心寺かわら版

第十五号 平成二十一年一月発行

新年明けましておめでとうございます。旧年中は当山の護持運営にご協力いただき誠に有難うございました。

昨年はその年を表す漢字に「変」が選ばれたように変化の一年でした。しかし残念ながら、悪い意味での「変」であったようです。この「変」（かわる）と近い意味を持つ字に「転」があります。「転」は（めぐる、うつる）ということで、浄土真宗では「円融至徳（えんゆうしとく）の嘉号（かこう）は悪を転じて徳を成す正智」（『教行信証』）などと用い、あらゆる功德をそなえた名号（南無阿弥陀仏）は、悪を転じて徳に変える正しい智慧のはたらきであるといえます。今年がお念仏の「転」によって、より良い「変」の年となりますよう念願いたします。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

南無阿弥陀仏

「救いの道〜親鸞聖人とアジャセ王悲劇〜」

去る十月二十八日綾歌総合文化会館アイレックスにて、第三十五回真宗教団連合同法大会が、九百名の来場により盛大に開催されました。劇団音芽ミュージカル『阿闍世王』では、美しい照明・音楽によって彩られた中で、父ビンバシヤラと母イダイケ、息子アジャセが悲しみの中にも救われていく物語を熱演いただき感動を呼びました。鍋島直樹先生の講演「親鸞聖人とアジャセ王悲劇」では、この物語の深い心を自身の体験も含めてせつせつと、時にはユーモアを交えて語っていただき、多くの方に共感をいただきました。当山からも二十名近く参加いただきましたが、機会があれば当山でも催したいと思っております。



劇団音芽



鍋島直樹先生

「映画『おくりびと』と『納棺夫日記』」

昨年、本木雅弘さんが主演した映画「おくりびと」がモントリオール世界映画祭でグランプリを受賞、日本アカデミー賞十三部門で優秀賞を受けるなど話題になりました。

この作品は、本木さんが十数年前にインドを旅した際、ヒンドゥー教の聖地ベナレスで、遺体を焼き、その灰をガンジス川に流す風習を目の当たりにしました。それは“あらゆる業から解き放たれて楽になる”というような場所で、その光景を見たときに若いなりに死生観に興味を持ち、納棺という未知の職業を通じ人の心の在りようを覗けないかと思ひ立ち、ついに実現したものだそうです。

人生に迷いながら成長していく元チェリストの新人納棺師・大悟（本木雅弘）、その彼を育てる葬儀社社長・佐々木（山崎努）、夫の仕事に嫌悪感を抱きながらもやがて彼を理解し尊敬していく妻・美香（広末涼子）、登場人物がそれぞれの人生をまっすぐに見つめていく物語です。

私はこの映画の存在を知った時、青木新門氏の『納棺夫日記』（文春文庫）が頭に浮かびました。青木氏の講演を聞いたのは七、八年前だったでしょうか。本木さんも『納棺夫日記』に出会われ、青木氏と親交を持たれて



影響を受けていると知り納得しました。

実際の納棺夫であった青木氏も映画の主人公・大悟も、最初は死への恐怖や死体への嫌悪感から納棺の仕事を嫌がり、家族・親族にその仕事を隠します。しかし、次第にその心が消えていきます。それは、青木氏にとっては、昔付き合っていた恋人の父親の納棺の際に、眼一杯に涙を溜めながら汗を拭いてくれた彼女の軽蔑や哀れみや同情など微塵もない、私の全存在が認められたような眼差しと振る舞いからでした。大悟にとっては、愛するものを亡くした悲しみの中で遺族が心から感謝してくれた時、また、自身にとって大切な人の納棺を通して、妻にその荘厳さを理解してもらえた時だったでしょう。



「死」を穢れと考える思想においては、穢れから逃れようとして死を見えないように遠ざけたり、清めたりしなければならなくなります。ですから納棺儀式も穢れたものとして受け取られません。亡くなった人を「穢れ」と感じることは悲しいことで、浄土真宗

にないの言うまでもありません。

青木氏は、死後何カ月も経ち、蛆のわいている遺体に遭遇して「蛆も生命なのだ。そう思うと蛆たちが光って見えた」そうです。

そして「毎日毎日、死者ばかり見ていると、死者は静かで美しく見えてくる」という心境に至ります。

納棺夫をしていることに激怒していた叔父が亡くなるときに、柔和な顔で「ありがとう」と繰り返し返したそうです。その後、三十歳で亡くなった医師・井村和清さんの遺稿を読みます。癌の転移を知った彼は、「その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとつても明るいのです。スーパーへ来る買い物客が輝いて見える。走りまわる子供たちが輝いて見える。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小石までが輝いて見えるのです。アパートへ戻って見た妻もまた、手をあわせたいほどに尊く見えました」と書き綴っていました。叔父の柔和な顔と井村さんの言葉が重なってきたそうです。

そして、「死に近づいて、死を真正面から見つめていると、あらゆるものが光って見えてくるようになるのだろうか。それはどんな光だと言われても説明しようがないもののように思えた。私の手を握って「ありがとう」と言った叔父の顔にも、多くの死者たちの顔にも、あの光の残映のような微光が漂っていた。死と対峙し死と徹底的に戦い、最後に生と死とが和解するその瞬間に、あの不思議な光景に出会うのだろうか。人が死を受け入れようとし

た瞬間に、何か不思議な変化が生じるのかもしれない」と語ります。

浄土真宗の土徳のある北陸に育った青木氏は、親鸞聖人のことばによって、その「光」に領かされます。「親鸞がこの〈ひかり〉を不可思議光と名づけたように、日常我々には見ることができない」、「親鸞は見えなくてもいいのだという。見えないままに、その不可思議光を信じなさいという」、そして「極重悪人唯称仏 我亦在彼撰取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」と正信偈を引用し「救いようもない者たちよ、みんな光の中にいるのだ。今はただ煩惱に遮られて見えないだけである。しかし大悲（ひかり）は永遠に輝いて、私たちを照しつづけている。だから念仏をと覚えていればよいのだ」と理解し、「帰命無量寿如来 南無不可思議光（とわのいのちとふしぎなひかりに帰依します）」と稿を閉じ、わが身を照らす光の中に安心を得ておられます。生と死は分け隔てされるものではなく、生死（しょうじ）すべてがいのちであり、浄土、かぎりないいのちの世界は私と離れてある世界ではないと教えて下さいます。

私も小さい頃、死に関わるのが怖かったものです。近しい親族がいなかった方の遺体を父と二人で抱えて運んだ感触を今でも覚えています。僧侶として自坊に戻り、すでに十年の間、臨終勤行や葬儀など法事を勤めさせていただいている今では、怖さではなく身が引き締まる思いがします。それは、誕生とともに人生の一

大事である最後の時、葬送に関わっているという実感からでしょうか。五千年も前に埋葬された方のお骨から花粉が発見され、花を供えて弔われていたという事実から分かるように、昔から人は葬儀においていのちの尊厳を感じてきたのでしょうか。

『おくりびと』の作品紹介には「人は誰でもいつか“おくりびと”“おくられびと”、あなたは大切な人をどうおくりますか、そしてどうおくられたのですか」とあります。青木氏は「我々はどこへ行くのかは、葬送の現場には大いに関わってくる」とおっしゃいます。

私たちは、“おくる”儀式である葬儀を仏式で勤める意義を確かめなければならないでしょう。この映画では、火葬場の担当者・平田（笹野高史）は「死は門です」、「また会おうぞ」と語ります。浄土真宗において「門」という字を考えると、七高祖の一人である曇鸞大師が「往生浄土の法門」ということばを使われます。必ずくぐらなくてはならない「門」としてある「死」ですが、「南無阿弥陀仏」（はかりしれないひかりとかぎりないいのちのはたらき）によってさとりの世界に生まれ行く「往生」と説かれます。

私も映画中の大悟のように、荘厳な「おくりびと」になればと思います。そして、「門」をくぐられた方を前にして往生の道を聞き開き、これからの人生に「大悲の光」を感じつつ歩むことこそが仏式で葬儀を勤める意義でしょう。